

この空間の中で神の現実が身を起こしていきます。

人間が神の現実を直接に感知するということ、そしてその結果、神の現実がその大いなる権能をもって人間を揺さぶり、その近さをもってその人を溺れさせるということも、ありえないことではありません。その場合は、その人は祈りのこの偉大にして親密なる秘密を経験していることになります。その人はこの秘密を畏敬のうちに受け止め、大切にすべきであります。けれども屢々、そののみかむしろ大抵の場合は、そうはならず、一切は静寂のままです。あの方が「ここに」おられると、祈っている人が自らに言って聞かせたその神は暗闇の中に留まったまま黙しておられます。そして、その場合には、祈りは、信仰に担われて、この黙している暗闇の中へと入って行き、そこで頑張り抜かねばならないのです。

祈っている人は、心を統一しているなかで、「ここに神がおられる——そしてここにわたしもいる」と言います。このことを実際に実行しようとするとき、ひとつの極めて重要な意味状況をその人は覚えることになります。すなわち、その人は「ここに神がおられる」と「ここにわたしがいる」という二つの文章において「いる」という語が別々の意味を持っていることに気が付きます。いる——ある——存在する——おられるという語におけるこのような語義の相違ということは、自然の生命においても既に当っていることがあります。誰かが、「この部屋にあるのは——いるのは？」と尋ね、わたしが「真ん中にはテーブルがあり、窓のところにはバラが咲いていて、絨毯の上には犬が腹這いになってい、わたしの前には友人が立っている」と答えるとします——この

場合、わたしはこれら様々な事物や生き物全てについて、それらが部屋に存在する、と言ったことになります。

けれども、それらは同じ仕方で存在しているわけではありません。生きていて成長もする植物はテーブル以上のものですし、存在する仕方もテーブルとは別です。わたしを見知っていて私の呼び声に答える犬の存在はもう一段強烈ですし、存在する仕方も別の新たなものです。そして、認識し愛することのできる自由と尊厳を持っている人間の権能性はさらに強く、在り方もまた別の新たなものです。そして、人間たちは人間たちで、現にその場にいるという同じことにおいても別々の権能性と在り方を持つことがありうるのです。誰かが部屋に入ってきて、そこにいます。ただし、ただそれだけのことで、他の人がその人との関わりで何かしなければならず、としても、せいぜい、その人を迂回して通らねばならないということだけという存在の仕方もあります。別の人は、誰かがそこで話をしようとするかぎり、その人のことを考慮に入れざるをえないような仕方でそこにいるかもしれません。第三の人は、現にそこにいるというだけで、その場にいる人々の中心になっているかもしれません。この相違は、ここで言わんとしていることにわたしたちの注意を喚起するものです。神は、他の何物も、他の何びとも同じ仕方では存在していない或る仕方で現にここにおられるのです。

神が存在しておられるのは、ご自身のみ起因してであり、ご自身のみによつてです。ですから、神おひとりのみが本質に固着した仕方で、そして本来の意味で存在している方です。聖書はこのことを神は「主」であると説明するという仕方で表現しています。神は、権能を振るうため

の対象となる諸事物が存在することによって、初めて主となられるのではなく、神は自分で自身の主でいらっしゃる。まさに本質からして、主としての権能を持っておられ、君主として君臨しておられるのです。それに対して、わたしがいるのは、わたしに起因してでも、わたし自身によってでもなく、神によってです。わたしの本質に固着した仕方のおかげではなく、神の恩恵の故にです。本来の意味においてではなく、分け前に与かるという意味においてです。わたしの存在と、神の存在との間には、両者を繋ぐ「とーそして」は基本的には全く存在しません。「神とわたしがいる」という文章は意味をなさない文章なのです。わたしが本気でこの文章を堅持しつづけようとするなら、わたしは冒瀆を吐くことになるであまりましよう。わたしの存在するは、神の存在するに対しては、被造物の存在するが被造物仲間の存在するに對するとは別の關係にあります。すなわち、わたしは単に「あの方のみ前で」しか、そして「あの方によって」しか、存在していないのですから。

心の統一をちゃんと実行していくとき、徐々にその人はこの真理を覚っていくことになります。自分が「神の前に」いる——神の前においてしかないものではありませんが、神の前では実際にいる——ということが分かるとき、人は大切なことを学んだことになります。神の前にいるということは偉大なことなのです。驚愕させるようなことかもしれませんが、極めて幸せにしてくれることでもあります。そして、わたしたちが見ていくことになるように、祈りの根本行為のうちのひとつ、すなわち礼拝はこのことに答えるものなのです。

神の面輪

さて、心を統一した人間が向いている神、——人間が神のほうを向くことができること自体、そうできる可能性を神ご自身が人間に与えておられる故なのではありませんが——この神とは誰なのでしょう？ この神は、あらゆるところにそのものの糸が張りめぐらされているのに言葉で言い表すことはできないもの、現存在の秘密、世界の最も深いところにある根拠、その他、人がどのような言い方で表現しようとするにしても、あれほど屢々人の口に上るあのものであるだけではありません。このようなものも存在しています、そしてそれも神に属してはいません。ただ、それはいわばあの方の息遣いでしかありません。あの方がご自分の働きを世界に浸透させるための手段にしておられる微振動でしかありません。神ご自身はもっと偉大です。単に純粹な意味のみでも、単一のアイデアのみでもなく、現実です。世界の深みや内奥、中心ないしは高みであるのみでなく、自分ご自身の中において一個の存在者なのです。単なる〔抽象的〕権能性などではなく、〔具体的に指すことのできる〕「あの方（＝彼）」なのであります。あらゆる啓示の始めにして終わりでもある啓示は、神があの方（＝ご自身であるとの証言の中にあります。ホレブ山（＝シナイ山）の上でご自身の使いの者にご自分のことを告げられたあの方と同じ、あの方ご自身である、との証言の中にあります。秘密に満ちた仕方で見えておられるあの方の名をこの使いの者が尋ねると、あの方は「わたしはわたしである、である」と答えられます（出三・一四）。あの厳粛な瞬間に、神は「権能ある者」、「義しき者」、「恵み深き者」といった称号は一切排除して、

あの方が実在しておられるその在り方に即した名乗り方をされます。すなわち、ご自身に起因し、ご自身の中に存在していて、自ら足りてい、ご自身の主であり、自由であって、ご自身に対してのみ責任を負っている者、と告げられるのです。ご自身に栄光を帰しているこの誇り高さこそが、あの方の本質なのです。

神はあの方Ⅱご自身、すなわちペルソナであります。しかも、最も権能あるペルソナ、最も高貴なペルソナ、最も純粋なペルソナであるのみではなく、一切の修飾限定語を拒否するペルソナそのものであります。^(真実)

神の現実が話題になっていた際に、神の現実とは、有限な現実と一緒にひと括りにして同じ概念を用いて呼んではならない類いのものであると言っておきました。神は無条件かつ端的に存在しておられます。他方、人間が存在しているのは神によって、そして神の前においてのみでしかありません。あれに対応することがここでも当てはまります。すなわち、神は自分ご自身を通して、そして無条件かつ端的にペルソナです。他方、人間がペルソナであるのは、神がその人間に呼び掛けておられるあいだのみなのです。

或る人が自分の直接的な感情から極く自然に、「あの方〔Ⅱ彼〕は」——あるいは「あの方〔Ⅱ彼女〕は」——という言葉をするのは、自分とは別人であり、しかも自分にとって最も大切であるとともに、自分と最も密接に結ばれてもいる人を指し、その人を念頭においてこの言葉を口にする時ではないでしょうか。ところで、或る人間が自己の人間存在の中心から、無条件かつ端的にあの方という言葉を発するとき、その瞬間にその人は、特に取りたてて神に思いを馳せて

いるわけでもないとしても、神を指し、神を念頭においてこの言葉を口にしてゐる筈なのです。つまり、或る人間が、あの最奥の深みの底から、広大なる現存在の内奥に向けて「あなた」と呼び掛けるとき、そこで呼び掛けられてゐる相手は神である筈なのです。

祈りが向っているのはこの神です。この種の関係のための極めて美しい一表現が、「神の面輪」という言い方をする際の聖書にあります。

この表現は先ずはひとつの比喩を形成しています。というのは、わたしたちにあるような面輪は当然ながら神にはありませんから。なぜなら、神には身体がありませんから。「他方」ひとり人間のみは——ちなみに、人間の魂だけではなく、人間「の全体」が——神の似姿です。ですから、本質からして人間に固有であるものは、神についての知らせを含んでもゐるものなのです。人間にとって面輪の役割を果たしているものが、一切の人間の諸概念を超越する或る仕方においてはありますが、神においても存在しています。人間はその形態、姿かたちをもって諸事物の一員として空間の中に立っています。この形態とは、人間が物質と様々な力からなっている統一ある単位であることを、様々な事象と形からなる一個の秩序を形成していることを表現するものです。人間が何かを築き上げたり、自らを展開させたりすることができることを、闘ったり、征服したりすることができることを、権利と責任を持つてゐることを表現するものです。それに対して、「話している相手に真っ直ぐに向けられてゐるものとしての」「面」が意味しているのは、その人は自分の内奥の向きを決めることが、或る人間に注意を向けることができるということ

あり、好意をもって、あるいは敵意をもって、愛しつつ、あるいは憎みつつその人間の傍に
 ことができるということです。この側面は実に数多くの言い回しの中で表現されてきたこと
 といえば、「定めに額ひたいを供する」(「運命に敢然と立ち向かう」とか、「危険を直視する」とか、
 「誰かに微笑みかける」とか、その他この種の様々な言い方があります。面とは、ペルソナを、
 そしてペルソナの自由を表現するものです。と同時に、或るペルソナが自分のほうへ歩み寄っ
 てくる者を迎え入れていることを、別のペルソナの振る舞いを受けとめていることを表現するもの
 でもあります。この一切が、あらゆる表象を超える仕方でも神の中にも存在しているのです。

そこからたとえば、聖書は「神はその面輪おもてがわを人間の上に輝かせる」と言っています——ただし、
 面という形象を介しては、明るく広大であるという天のもう一つの形象が漏れ出てきています
 (詩三〇「三二」・一七)^(原注)。あるいは、神は不正をなす「者にその(怒りの)面輪を向けられる」
 ——ただし、ここではもう一つの形象、即ち、吹き募ってくる嵐の形象も滲み出ています(レビ
 一七・一〇)。あるいは、敬虔な人は「神の面輪の前に進み出る」(詩九九「一〇〇」・二)とも
 言っています。神の面の秘密が特に美しく表現されているのは、詩篇第二六においてであります。
 すなわち、「あなたは以前わたしたちに仰せになられたではありませんか、『わたしの面を求め探
 しなさい』と。おお主よ、あなたの面を今わたしは求め探しています。あなたの面をわたしの前
 から隠してしまわないでください！ 怒りのうちにあなたの下僕を斥けることはなさらないでく
 ださい、あなたこそがわたしの助けなのです。わたしを押し退けないでください、わたしを置き

去りになさらないください、わたしの救いの神であられるあなた！ 父と母はわたしを置き去りにして行ってしまいました。けれども、おお主よ、あなたはわたしを迎え入れてください。」
 (二六「二七」・八一〇)。

祈りに向けての第一歩は心の統一です。第二の歩みは神の現実を自分の前に現前させてみることであり、自分は創造されたものであるということを内的に実行してみることです。第三の歩みを形成しているのが、神の聖なる面輪を求め探すことです。祈っている人は、このようにしていくなかで、神が単に至高の君主としてのあなたであるのみでなく、その人にとっての、祈っているその人にとっての生けるあなたであることを覚ろうと努めるのです。神は、私を見知っていて、わたしを指し、わたしを念頭において声を掛けておられる方です。それも、単に無数の人間たちの中の一人としてだけではなく、わたしというペルソナが一人しか存在せず、かけがえのない存在であるが故にこそ、このわたし自身を指し、このわたし自身のことを念頭において声を掛けておられるのです。確かにわたしはあの方の前では無です。けれども、わたしに呼び掛けて、わたしがあの方とだけいるようになり、ご自分との或る間柄に入るようにと、わたしを引き寄せることが、あの方がなさろうと思われたことであつたのです。愛のこの秘密の中心をこそ祈りは向いているのです。

その人は「神の面輪を」——「神の心を」という言い方をしてもよいでしょうが、これはこれで新たな秘密になってしまふのかも知れませんが——求め探すように、との言葉が言わんとしてい

るのは、このことなので。こうすることは簡単なことではありません。わたしが祈りを開始するとき、わたしの前には周囲の様々な事物があります。わたしの中にあるのは、わたしの様々な思考と感情の滅茶苦茶な混乱か、そうでない時には殆どいつも、全くの空虚でしかありません。確かに信仰はわたしに、神は現にここにおられると言ってくれてはいます。けれども、神の存在についての明瞭な意識を持っていることなど、わたしには稀にしかありません。確かにあの方はあらゆるところにおられます。けれども、こういう表現法が許されるとするなら、あの方は必ず、わたしがいる側とは逆の側に、隠されている側におられます。そして、わたしといえば、あの方をそちらの側からいわば強引に連れ出してきて信じなければなりません。覆われている側、暗闇、空虚の中から、こちらに向けられているあの方の面を強引に引っ張り出してきて信じなければなりません。わたしは決めておられるあの方の心を求め探し出してきて、わたしの祈りをその中へと向けねばならないのです。わたしは語り掛けのための内的な関連付けを見出さねばなりません、その関連付けが失われて行く度に、改めて仕立て直さねばなりません——なぜなら、この関連付けが失われて行くということは常時起こっていることです。繰り返しいつも、祈りは単なる自己対話へと脱線して行きます。そればかりか、言葉の単なる空回りとなってしまうことすら稀ではありません。話しをいつも話し掛けとすること、自己対話を常にふたりの間の対話とすることが、祈りに向けての本来の準備であり、絶えず改めて実行していくべき修正でもあります。

神の面輪の前において初めて、人間は自分自身の本当の面輪をも受け取ることになります。人

間の面とわたしたちが名付けているものは、決して出来上がったものではありません。人間の面においても目に見える目鼻立ちなどはいわば一番外側の層でしかありません。外的な目鼻立ちから深層へと入っていくのです。すなわち、内的な形態、姿かたちへ、霊の刻印へと、心情の明晰性と断固たる堅固さへと、心の親密さへと。人間は普段は仮面ぐらいしか着けていないのが普通です。面がどれほど生き生きしたものとなりうるかということは、たとえば、或る人間の心を捉えている会話の推移の中で、あるいは或る人に深い感動を与えている出会いの進行の中で、その人の本当の顔が突如として自己を覗かせ、今こそ初めて、その人の本当の顔が内側から出来上がってきているかのような印象を受ける際などに、経験することのできることです。このようなことはみな自然的な事柄であります。神的事柄を指し示しているものではありません。神の前において一人前に扱って貰えるだけの面輪を人間は自分からはまだ全く持っていません。そのような面はあの方の主導で初めて成立していくものなのです。あの方に話し掛けているなかで初めて、わたしはまともに或る何者かに——あの方がわたしを創造され救済された時に指し、念頭に置いておられたあのわたし——自身に——なっていくのです。この面は祈りの中で初めて、形成され、展開し、確固としたものになっていくのです。

外的な秩序

ここまでのところで話題になっていたのは、祈りの実践、練習ということでしたが、これを話

記述は、あるいは「入学準備学級」の枠を越えるものかもしれない。しかし、他の全てのことにとっての基礎になることであるので、境界を狭くとらないことが必要と思われた。

11. Guardini, Vom lebendigen Gott, Mainz 1936 60頁以下を参照。
12. これらの考えが神の自由に抵触するものを意味していないことを特に強調する必要はないであろう。この点においても神は「主」であり、いかなる被造物も神を拘束することはできない。そこから、あの近さと分有も、神の自由にもとづいてのみ、そして恩恵としてのみ可能なのである。そうではあるが、ここで問題になっているのは、本当の近さであり、本当の分有ではある。
13. この点に関しては、Guardini, Der Herr, Betrachtungen über die Person und das Leben Jesu Christi, Würzburg 1940 の625頁以降を参照。
14. この点に関しては、Guardini, Die christliche Liebe, eine Auslegung von 1 Kor 13, Würzburg 1940 を参照。
15. この点に関しては、Guardini, Welt und Person, Würzburg 1940 104頁以下参照。
16. この点に関しては、Guardini, Das Gebet des Herrn, Mainz 1934 参照。
17. この点に関しては、Guardini, Vom lebendigen Gott, Mainz 1936 123頁以下と147頁以下を参照。
18. "In Spiegel und Gleichnis"の中でわたしはこのような隠れた祈りを幾つか取り出してみようとしたことがある。(2. Aufl. Mainz 1940, 74頁以下。[7. Aufl. Mainz-Paderborn 1990])。
19. 典礼の中の祈禱文についてはBesinnung vor der Feier der heiligen Messe I, Mainz 1939 120頁以降も参照。
20. 聖人たちの著作においては時として、自己蔑視の極めて強烈な表現が見出されることがある。これらの表現は、それらが由来している状況と、それらの表現を用いている人の人格全体から見て、初めてその意味を持つものである。従って、これらの表現をタイプの異なる生活状況にその

原 注

1. 神に三つのペルソナがあることについては次章を参照。
2. 詩篇の番号はヴルガータ訳による。[] 内に原典の番号を示す。
3. この方向での試みの幾つかについては、Guardini-Messerschmid, Deutsches Kantual, Mainz 1931の71-81頁および152-161頁を参照。
4. 創造についての話において「日」がどういう意味を持ち、いかなる意味を込めて「神の休息」という言い方が用いられているのかといった問いに立ち入ることはここではできない。この問題全体についても、Guardini, Besinnung vor der Feier der heiligen Messe I, Mainz 1939の85-99頁を参照されたい。
5. ただし、教会のドアには許容しうるかぎり長時間にわたって鍵が掛かっているということも必要であろう。もちろん、儀式の時間以外は閉めておくということにも種々の理由がある。とはいえ、それらの理由は、人々が教会に対して自分の家に対するごとき帰属感を失うことになるかもしれないという可能性と比較して真に良心的に検討されねばならない。[自分の出入りのために] ドアに鍵が掛かっていない時間が僅かしかない「自分の家」とは、いったいどのような家なのであろうか。— 聖なる場所の本質に関してはGuardini, Besinnung vor der Feier der heiligen Messe I, Mainz 1939, 62-84頁を参照。
6. この点についてはGuardini, Kultbild und Andachtsbild, Würzburg 1939を参照。
7. この点でのひとつの提案がGuardini-Messerschmid, Deutsches Kantual, Mainz 1931 83-84頁にある。
8. この全体については、Guardini, Heilige Zeichen, Mainz 1933 および Liturgische Bildung, Rothenfels a. M. 1923 を参照。
9. 本章におけるこのアイディア、および関連するアイディアについては、Guardini, Welt und Person, Würzburg 1940の 28-50頁 [第六版 Mainz-Paderborn 1988 では45-65頁]を参照。
10. キリスト教の神現実と、祈りに対するその意味についてのここから先の

Lehre vom Tode, der Läuterung nach dem Tode, Auferstehung, Gericht und Ewigkeit. Würzburg 1940.

29. 浄化の時期にある魂たちとの関係については、Guardini, Das Fegfeuer, "Christliche Besinnung" シリーズ17号 Würzburg 1940を参照。
30. この点については、Guardini, Die Heiligen, "Christliche Besinnung" シリーズ25号 Würzburg 1940 参照。
31. この点については、Guardini, Nachwort zu: Bruder Leo, Spiegel der Vollkommenheit, übersetzt von Wolfgang Rüttenauer, Leibziz 1935 参照。
32. 既出のGuardini, Der Rosenkranz Unserer Lieben Frau, Würzburg 1941 を参照。
33. この点については、Guardini, Vom Leben des Glaubens, Mainz 1935; Glaubensgeschichte und Glaubenszweifel, "Christliche Besinnung" シリーズ 5号 Würzburg 1939参照。
34. 以下の諸点については、Guardini, Vom Geist der Liturgie, Freiburg 1939; Liturgische Bildung, Rothenfels 1923; Besinnung vor der Feier der heiligen Messe I und II, Mainz 1939; Ein Wort zur liturgischen Frage, Mainz 1941を参照。
35. この言葉は、たとえば、司祭の祈りこそが本来は十全の価値を持つ祈りと見なした上で、そのような祈りと比較して民間信心業を貶めようとするものではない。このような誤解の可能性があるとの示唆を受けたので、この点を予め断っておきたい。この言葉はむしろ、以下において話題にするような特徴を持つ祈りの或る形式を指すものである。

まま移し変えたり、ましてやキリスト教的現存在の基本姿勢そのものとしたりしてはならない。

21. この点についてはGuardini-Messerschmid, Deutsches Kantual, Mainz 1931, 127頁を参照。
22. Der Rosenkranz Unserer Lieben Frau, Würzburg 1940.
「聖母のロザリオの祈り」天使館発行
23. この点についてはGuardini, In Spiegel und Gleichnis, Mainz 1940 [Mainz-Paderborn 1990] 96頁以下を参照。
24. もちろん、このことをもって、単なる、心理学的な意味での「意識」の領域は超えられ、内的生活の全領域が問題となっている。従って、本来は、「意識」の代わりに、習得した習性、人格の形成、実現といった言い方をしないといけないのかもしれない。ないしは、どういう表現をとるのがよいとしても、信仰の内容が具体的実存の内容となることと言うほうがよいのかもしれない。それにも拘らず、「キリスト教的意識」という表現には幾つかの利点があるので、暗示したような比較的広い意味においてではあるが、これを残すのがよいと思う。
25. この点については、Guardini, Welt und Person, Würzburg 1940, 137頁以降 [Mainz-Paderborn 1988, 173頁以降] および Was Jesus unter der Vorsehung versteht, "Christliche Besinnung" シリーズ 1号 Würzburg 1940参照。
26. この側面に言及するとしても、摂理思想の包括的側面を忘れてはならない。後者に依るなら、神は文字通り一切の出来事を統裁しておられる。それも、啓示の対象となっている領域以外のところにおいても、しかも、神の国についてのあの心配りを人間が自分の心の中に取り上げる以前においてもである。現在のこの箇所で言及されているのは、摂理に関するメッセージのうち、山上の説教の中に登場してくるかぎりでの、その中心点のみである。
27. この点については、Guardini, Das Gute, das Gewissen und die Sammlung, Mainz 1931 18頁以降および46頁以降を参照。
28. この点については、Guardini, Die letzten Dinge. Die christliche

としての顔を指すために一般に用いられる語であり、面輪を当てた Angesicht も、面を当てた Antlitz も、今日の用法からするなら、その雅語である。

10. ドイツの家庭の、特に台所を兼ねた食堂や居間などでは十字架は壁面ではなく、部屋の一隅の天井近くに部屋の中心に合わせて斜め下を向く形で懸けてあることがしばしばある。
11. 池田敏雄著 『教会の聖人たち』上巻 一九九六年（第三版）サンパウロ社一五一頁にも紹介されている有名なエピソード。稲垣良典教授もその『トマス・アクィナス』（講談社学術文庫版 一九九九年）の二二七頁で同じ逸話を紹介し、典拠として Bernardus Guidonis を挙げておられる（二三六頁記載の注一六参照。八三頁記載の注三も）。聖トマスの伝記作者として名高い Guillelmus de Tocco も "Ystoria S. Thomae de Aquino" の五二章においてこのエピソードの元になったと考えられる話を伝えている。ただし、そこに記されているのはキリストが聖トマスに賞賛のことばをかけられた話までで、二人の間の「褒美についてのやりとり」に関する言及はない、(Fontes Vitae S. Thomae Aquinatis. cura et labore D. Prümmer O.P. Tolosae では一二六頁、Ystoria S. Thomae de Aquino de Guillaume de Tocco (1323). Edition critique, introduction et notes Claire de Brun-Gouanvic Toronto 1996 では一八九頁)。
12. 英訳は出典としてアヴィラの聖テレジアの Poem 9, "Nada te turbe" を挙げている。
13. 『三位一体論』第十四巻において人間の魂が神の似姿であることを解説する際に、神のことが分かる能力があり (eius [=Dei] capax est)、神を分有することができること自体が魂を神の似姿たらしめているとし、De Trin. l. XIV, c. 8 (ML 42, 1044)。
14. カンタベリーの聖アンセルムスの『プロスロギオン』第十三章、なかんずく末尾の「あなたは、主よ、唯一無比の仕方で限界なく永遠なるお方です、とはいえ、他の霊たちも限界なく永遠です」を下敷きとした表現と思われる。(St. Anselm's Proslogion, transl. with an introd.

訳 注

1. 原語は秩序、整理、配列、規律、規則、命令といった広範な意味を持つ。
2. 原語は実践することよりも、むしろ練習、訓練、さらには熟達すること、身について習慣となることといった意味を持つ。英語の 'practice' にはほぼ対応する語。
3. 募金といった意味にも用いられることがある語であるが、本書においては、「散漫になっている心、精神、集中力を集めてきて、落ち着かせ、集中すること、潜心すること」を意味する。
4. 実存と訳されることもある語。ゲルディーニにおいては本質に対立する意味で用いられるよりも、生命、生活、なかんずく人間が生きていくということの現実の姿、特に神との関連において見た人間の具体的な生き方、さらには被造世界の現実全体などを意味する。「神の生命の現実」といった意味合いで神についても用いられている。本訳書においては一貫して「現存在」を当てている。
5. 「ミュンヒハウゼン男爵の冒険」として知られる話のひとつ。Gottfried August Bürger, Wunderbare Reisen zu Wasser und zu Lande, ... des Freiherrn von Münchhausen. Insel Verlag, Frankfurt a.M. 1968 (1986) 31頁。
6. 原語は *innewerden* である。「覚っている」と訳出している語 *innesein* とともに、本書においてゲルディーニが好んで用いている語で、一般には「気付く」、「気付いている」といった意味に用いられる語であるが、普通われわれが「気付く」場合より深い層で起こっていることを指している。本訳書では時に「心の中心に据える」、「心の中心に座を占めている」と訳出してもいる。
7. 二五六頁の記述についての訳注20を参照。
8. 原語は「ある－いる－存在する」を意味する一語。英語の 'be' に当たる。
9. 以下において ^{おもわ}面輪、^{おもて}面、顔と訳し分けた語は、いずれも原義からするなら、「見る、見つめる、視線を向ける」といった動詞と関わりを持つ。なお、ここで顔という訳語を当てた Gesicht が、生物学的身体の一部

なお、十字架といわゆる三角メダイの間にある五個の玉のうち中央の三個の小玉のところでは、それぞれ信、望、愛の強化、深化をイエスに願う関係文が追加される。

19. 『アントニウスの生涯と回心』の中で伝えられている話。MG 26, 860 参照。
20. "solus cum solo"ないしは"sola cum solo" をモットーとして孤独のうちに神との一致を求めて荒野で修業を続けた隠修士たちの精神を指すと思われる。アウグスティヌスによる改鋳とは、『告白』の冒頭近くの有名な言葉「あなたは、確かに、私たちをあなた自身に向けて創り給うたので、私たちの心はあなたのなかにいこうまでは、安きを得ないのである。」(第一巻第一章一、今泉三良訳 河出書房 二五頁)を指すと思われる。ニューマンについては、John Henry Cardinal Newman, Apologia Pro Vita Sua, New York 1950 (The Modern Library) 二〇三頁を参照。
21. いうまでもなく、[当時の] ドイツにおける状況を反映している。

and philos. comment. by M.J.Charlesworth University of Notre Dame Press Notre Dame, London 1979 = reprint of the first edition by Oxford University Press 1965 一三四頁参照。)

15. es. 英語の'it'にあたる中性の人称代名詞。
16. 『新カテキズム』は二七〇五番以下においてmeditatioの解説をしている。ドイツ語版本文はdas betrachtende Gebetと訳出したうえで、meditatioのドイツ語形die Meditationを同格語として加えている。ドイツ語のbetrachtenという動詞は祈りとしての「黙想する」の意味にも、知的な意味での「考察する」の意味にも用いられる。ラテン語のmeditariも本来は「省察する」、「反省する」の意味を持つが、本訳書においては、祈りの意味でのBetrachtungを「黙想」、Meditationを「瞑想」と訳し分けている。
17. 聖フランシスコの『小さき花』("I Fioretti")第二章にあるベルナルド修士が伝えたと言われているエピソード。イタリア語原文での言葉は直訳すると「わが神よ、わが神よ」であるが(『聖フランシスコの小さき花』久保正夫訳 新潮社版 大正 5年 5頁参照)、欧米の現代語訳では、ラテン語版にもとづいてしばしば本書にあるように訳される(St. Francis of Assisi, Writings and Early Biographies, Franciscan Herald Press Chicago 1973 一三〇三頁とそこに付された注1を参照)。
18. 「一連毎に一玄義——本訳書では秘密——を黙想する」仕方としては、日本では、黙想すべき各玄義を要約したテキストを各連を始める前に先ず唱え、その内容を心に保ち思いめぐらしつつ「めでたし」を唱えていくというスタイルが一般的と思われるが、ドイツでは、「めでたし」を唱える毎に、テキスト中の「イエズス」のあとに、各玄義を短く纏めた関係文をその都度追加するスタイルが採用されている。日本で行われているスタイルは、黙想する玄義の雰囲気や予め作っておいて、いわばその雰囲気の中を「めでたし」を唱えながら逍遙していくに対し、ドイツでは黙想する玄義をその都度表現的に口にすることによって、徐々に雰囲気や盛り上げていく構造になっていると言ってもよいかもしれない。